

2014 年度・社会思想史学会 セッション報告書「啓蒙の多様性と多元性—最近の研究動向から」世話人 田中秀夫

最近の啓蒙研究は、ポーコックのように啓蒙の多様性を強調する見解がある一方、ジョン・ロバートスンのように経済学の形成を重視する主張もある。彼の『啓蒙の主張—ナポリとスコットランド』が出たのは 2005 年で、すでに 10 年近くが経過した。その後の研究動向はどうか。

ブリテン啓蒙では帝国と宗教が重視され、アーミテージやブライアン・ヤングなどの若い世代の活躍が目立つ。ポーコックは『野蛮と宗教』の最終巻を準備中らしい。野蛮、宗教、科学がどうからまって啓蒙を生み出したのか、新たな関心が生まれている。ロイ・ポーターやホントは他界したが、イングランド啓蒙とスコットランド啓蒙の研究は活況で、後者ではシャーとエマズンの書物史と学派研究が際立つ。中国でもスコットランド啓蒙に関心が生まれている模様。わが国では水田洋、野澤協が健在で、スミスの法学講義が翻訳され、ピエール・ベール関連の翻訳も完結が近い。ランゲ、サン・ピエール、マブリの訳も出た。わが国ではフランス啓蒙研究が活発に見える。このセッションではますます盛んな海外の啓蒙研究をフォローしたい。今回はスコットランド、イングランド、フランスを比較した。

報告 1. 田中秀夫「スコットランド啓蒙—最近の研究動向」は、過去 10 年の文献リストを作成し、全般的な印象を述べた。リストは渡辺恵一氏に補足してもらった。

第一に 2007 年は合邦 300 年記念プロジェクトが各種企画され、翌年にかけて研究成果が集中的に出た。Unionist と Nationalist の論争に注目が集まった。それは NPS が議会で多数派を占め 2014 年の独立投票へという直近の動きに関係している。第二に帝国でのスコットランドの研究が目立つ。帝国官僚、東インド会社、アメリカ建国等が論じられ、ディアスポラも関連している。S. Manning and F. D. Cogliano eds., *The Atlantic Enlightenment*, Ashgate, 2008 のような「大西洋啓蒙」研究も再登場した。第三に啓蒙と宗教の関係がある。啓蒙の本流をスピノザ以来の急進的啓蒙に求めるイスラエルの研究にもかかわらず、スコットランド啓蒙は穏健派啓蒙、イングランド啓蒙は保守的啓蒙である。スコットランド啓蒙と女性の関係、ジャコバイトとハイランドの研究も深まってきた。しかし、相変わらずスミスとヒュームの研究が突出しており、経済思想史研究も盛んで、経済学抜きのスコットランド啓蒙研究は、多様に可能だが、中核部分を欠くことになる。注目すべき伝記的研究として John Erskine、Johnstones、John Witherspoon、Buccleuch 研究などが出た。個人としては Broadie、Emerson、Devine の活躍が目立つ。

渡辺はわが国のスコットランド啓蒙研究の特徴 3 点と課題を述べた。(1)近代自然法学と共和主義、(2)「経済学の成立」問題、(3) グラズゴウ大学における「道徳哲学」の伝統：カーマイクル→ハチスン→(ヒューム)→スミス、以上 3 点の重視である。しかし海外で「啓蒙の多様性と多元性」を開拓する研究が飛躍的に進展するなか、わがスコットランド

啓蒙研究は転機に直面している。新しい方向性の研究も出ているが、視野を広げて再考する必要がある。(a)イングランド啓蒙(ブリテン啓蒙)との関係: Porter, R. (b)フランス啓蒙との交流: Broadie; Rasmussen; 野原. (c)アメリカ啓蒙への影響: 田中. (d)啓蒙と経済学①ナポリ啓蒙: Robertson, J. ②フランス啓蒙と政治経済学: ムロンのポリス論(米田; 野原)、フランス政治経済学の差異(ケネー、チュルゴーとコンドルセ、ネッケル; 安藤裕介) ③スミスの経済学はどういう学問として成立したのか? そもそもスコットランド啓蒙の文脈で成立を説明しえたのか? 研究者の関心がフランスへと移り、スコットランド啓蒙研究やスミス研究は後継者不足である。

報告2. 林直樹「イングランド啓蒙——いわゆる「デフォーの時代」を中心に」は、トレヴェリアンが「デフォーの時代のイングランド」と呼んだ空間に、果たして「啓蒙」は存在したかを問題にし、特徴的な見解を公表したジョン・ロバートスン、ロイ・ポーター、J・G・A・ポーコックの三者を比較し答えを出そうとした。

「イングランドには見るべき啓蒙が存在しなかった」としたのはロバートスンである。啓蒙の「箱(case)」、一定の範型に照らして複数地域の啓蒙運動を比較検討した彼は、他地域において盛期啓蒙が展開された18世紀半ばの数十年間、イングランドはこの「箱」の外にあり、啓蒙の主要特性「人間および政治経済の学の発展、社会進歩の歴史的調査、現存する社会・政治秩序への人間改良思想の批判的応用」が見られなかったとした。

これに対してポーターは、フランス啓蒙のような「フィロゾーフの小集団」による革新からは遠いものの、イングランドに啓蒙は存在したとする。それは「コーヒーハウス」に集まる雑多な常連客が社会生活の様々な問題に関して議論に議論を重ねる運動であり、少数の「前衛」によるものではなかった。

しかし、ロバートスンに言わせれば、ポーターのイングランド啓蒙は社会史・生活史的事例の寄せ集めで、啓蒙の定義も曖昧であり、ポーターがイングランド啓蒙を「国民的文脈」に即して評価したことも警戒すべきである。ポーターを反面教師とした彼は、とりわけナポリとスコットランドを比較対象とする国際的、域際的啓蒙研究を実践する。

ポーコックは異なる。彼はイングランド啓蒙を「保守的」啓蒙と呼ぶ。その含意は、17世紀末以来の財政金融・軍事革命を経て新登場した商業秩序に対し、古典的人文主義的共和主義の言語を用いてその「腐敗」を攻撃するカントリ派＝「古代派」の言説と、そうした商業秩序に公共性を付与して擁護しようとするコート派＝「近代派」の言説との対抗関係のなかでしかイングランド啓蒙は論じられないというのである。言説間の関係を重んじる彼は、国民的文脈と「国民を超えた」文脈の関係に着目する。イングランドの初期近代が生んだ「資本主義的人間」は妥協の産物であるが、それは移りゆく現状の追認による内部対立の回避(寛容)という消極性としての保守性が趨勢を占めたことによる。

デフォーが旺盛な言論活動を展開した「オーガスタン時代」は、古代派と近代派の言説が際立った対立を見せた時期であるとともに、言説の展開の可能性に溢れていた時期であり、学問的魅力に富んでいる。

野原慎司は次のようにコメントした。ロバートソンは、18世紀中葉の啓蒙の盛期におけるイングランドでの啓蒙の不在を指摘した。ポーターのようにコーヒーハウスや社交的文化のイングランドにおける隆盛に「啓蒙」を見ることも可能であろう。知の社会史を問題とするポーターと知の相互連鎖・流れとしての思想史を問題とするロバートソンでは、問題設定の次元が異なっており、議論がすれ違っているのではないか？啓蒙の知識人は、様々な国の書物を読む国際的な存在である。国際交流もあった。狭い意味での思想の流れを追う思想史なら、ポーコックやアーミテージのように文脈の国際性を言うことも可能であろう。ただし知は知識人だけのものではない。知識は書物や他の媒介物やコーヒーハウスを通じて流通する。この流通過程では、流通の器としてのコーヒーハウスなどが重要となり、知の流通の基盤としての国内社会の文脈が重要となる。その間に知の言語は変容するであろう。文脈主義は双方を同時に追えるだろうか？

報告 3. 米田昇平「フランス啓蒙—商業社会論の視点から」

18世紀啓蒙の厚い研究史において「啓蒙」の含意は多岐にわたるが、啓蒙の大きなうねりを引き起こした一動因が「安楽な暮らし」による世俗の幸福への希求を是認する世俗的倫理の広まりだとすれば、啓蒙と経済学は一貫して強い親和性を持っていたと言える。この親和的關係はフランスで特に顕著である。この文脈でフランス啓蒙を捉えるとき、啓蒙の経済学を担ったフランスの著作家とイングランドのデフォーや、特にマンデヴィルとの共通性が浮き彫りになる。マンデヴィルは、利益志向の功利的人間像をクローズアップした17世紀フランスの新思潮の影響下にあった点で、フランスの啓蒙の経済学と同根であり、またデフォーを含めて彼らは商業社会・消費社会への社会の変容という同じコンテクストに身を置いて、功利的人間が求める世俗的価値の実現、経済的繁栄の条件を探求した。他方で、なお絶対権力と不寛容が支配する旧体制下のフランスでは、政治制度等にも「光明」がもたらされねばならない。したがってフランス啓蒙においては、政治制度等の近代化が問題となる一方で、啓蒙の経済学の側面では「近代性そのものとの争い」が論点となるという錯綜した状況が生まれた。

このような視点からフランスの啓蒙の経済学に目を向けるとき、従来のフランス啓蒙思想研究が対象にした人物群とは異なる人物に注目せねばならない。報告では、商業社会の展開を晴れやかな文明の進展と重ね合わせ、その構成原理や発展の論理を探求したアベ・ド・サン＝ピエール、ムロン、モンテスキューに焦点を当て、三者三様の商業社会論、啓蒙の経済学の概要を述べた。功利主義のリアリズムに徹したサン＝ピエールは、一方で公共的利益を優先する立場から奢侈（消費の自由）を批判し、商業と製造業の発展を促すために賞罰制度を設けるなど、私欲と公益の一致をもたらす巧みな統治が必要だとした。モンテスキューは奢侈と労働による商業社会の発展を展望するものの、貴族中間権力を紐帯とする身分制秩序の維持による政治的自由の確保を重視し、そのような政治的利益に対し「商業」の利益を優先させなかった。経済学の知見によって啓蒙の課題に向き合った点でムロンは際立っている。

喜多見洋のコメント：米田報告は、啓蒙の多様性と多元性というテーマでフランス啓蒙を商業社会論の視点から扱っている。特に米田が主張しているのは、世俗的倫理の広まり

はヨーロッパ啓蒙を導く共通因子であったが、啓蒙と経済学の親和的關係がフランス啓蒙において顕著に現れていることである。米田はこの認識をもとに、アベ・ド・サン=ピエール、ムロン、モンテスキューの商業社会論を取り上げたが、次の三点を問題にしたい。

- (1) スコットランド啓蒙やイングランド啓蒙における経済学とフランス啓蒙における経済学との違いは、啓蒙と経済学の親和的關係の明瞭さと考えてよいのか。
- (2) これら3人の人物の社会経済思想とアングロマニの關係はどう考えたらよいか。
- (3) 報告では啓蒙と宗教の關係に触れられたが、世俗化を脱宗教と言い切ってよいだろうか。世俗化はせいぜい宗教的制約、縛りが弛んだという程度の変化なのではないか。

討論ではイングランド啓蒙の理解について多くの議論があった。